－金沢大学サテライト・プラザ　ミニ講演－

場所　金沢大学サテライト・プラザ

日時　平成１５年１月１８日（土）午後２時～午後３時３０分

テーマ　　「中国における外来語の翻訳と伝統文化」

講　師　　矢淵　孝良（金沢大学外国語教育研究センター教授）

１．はじめに

ただいまご紹介にあずかりました、金沢大学外国語教育研究センターの矢淵と申します。私はふだん大学で学生を相手に中国語を教えております。このような席で講演をするということは、生まれて初めてというわけではありませんが、それに近い状況でありまして、うまくお話しすることができるかどうか、皆さんに私の言いたいことがうまく伝えられるかどうか、若干不安を感じております。よろしくお願い申し上げます。また、先程お話がありましたように、この講演の模様は、テレビ会議のシステムを通じて高松町に送られているということです。高松町の皆さん、しばらくおつきあいいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします（拍手）。ありがとうございます。

実は、テレビ会議うんぬんという話は、私がこのミニ講演の講師を引き受けたあとでお聞きしました。最初からテレビ会議うんぬんということであれば、ひょっとしたら「もう少しテレビ映りのよい方にお願いしてください」とご辞退申し上げたと思います（笑）。しかし、いったん引き受けた以上、テレビだからといって逃げ出すのはあまりにも情けないと思いまして、今ここにこうして立っております。ただ、１時間半の講演の間、私１人が画面に映っておりましても、高松町の皆さんはおそらく退屈を感じてしまうだろうと思いまして、私の何倍も、いえ何十倍、何百倍も見栄えのいい方をお招きして、この講演の手伝いをしていただくことにしましたので、ご紹介申し上げたいと思います。先程も紹介がありましたが、外国語教育研究センターの同僚であります趙菁さんです。

（趙）　趙菁と申します。今日は皆さんとお会いできて、すごくうれしいです。よろしくお願いします（拍手）。

趙菁さんには、後程中国語の発音の部分でお手伝いをお願いしようと思っております。

ところで、私の講演のタイトルは「中国における外来語の翻訳と伝統文化」ですが、こ

の題目を付けるとき、あるいは提出しますときに、少しためらいを感じました。と申しますのは、「外来語の翻訳」という表現が、はたして日本語として存在するのかどうかということが少し気になったのです。外来語というのは普通、例えば「テレビ」や「ピアノ」などのように、すでに日本語として定着しているものを言っているわけです。すなわち、外から入ってきて、国語の中に定着しているものを、外来語と言っているのだと思うのです。ですから「外来語の翻訳」という言い方をしますと、一度定着している言葉をさらにもう一度翻訳し直すものだと解釈されてしまうのではないかということを恐れまして、どうしようかと迷いました。しかし、「外国から入ってくる言葉の翻訳」と長くしてしまうと、講演のタイトルとしてはふさわしくないと思いまして、やや不適切な日本語の表現かとも思いましたが、このようなタイトルを選ばせていただきました。要するに、ここで「外来語の翻訳」と言っておりますのは、外国から入ってくる言葉をいかに国語に定着させるか、その翻訳をするということを「外来語の翻訳」と言っているのだとご理解ください。

それでは、本題に入らせていただきます。はじめに日本語を取り上げ、その違いから中国語の外来語の翻訳の特徴を明らかにしたいと思います。国立国語研究所、正式には独立行政法人国立国語研究所というのですが、その中に設置された外来語委員会というところから、昨年の12月25日に「わかりにくい外来語をわかりやすくするための言葉遣いの工夫についての提案」というやたら長ったらしい提案が出されました。この担当者というか当事者も、おそらく長すぎると思われたのでしょう。「外来語の言い換え提案」という副題が付いております。これは、翌日の新聞などで大きく取り上げられましたので、ご記憶の方も多いのではないのでしょうか。

私が見た朝日新聞では、1面トップの扱いでした。この提案では、合計63の外来語についての言い換え例を示してありました。そのうち、朝日新聞が記事の見出しに挙げていた例を申します。医療関係の言葉でインフォームド・コンセントというのがあります。これは、十分説明をして患者さんの了解を得て治療をするということですが、これを「納得診療」と言い換えます。あるいは、障害のある方が建物に入るためにスロープを付けることなどをバリアフリーと申しますが、それを「障壁除去」と言い換えるか、注を付けるのがふさわしいという提案でした。

この63の言い換え例にはすべてあたりましたが、それが全部適切かどうかということについては、意見が分かれるのではないかと思います。ただ、私自身の考えをいいますと、いわゆるカタカナ言葉の使用そのものに反対ではありません。と申しますのは、言葉とい

うのは外来語に限らず、意味を伝えるだけではなく何らかのイメージも伝えたいわけです。そういう意味で、仮に外来語を使って伝えることがふさわしい、イメージを外来語でなければ伝えられないというのであれば、それは外来語を使えばいいのだと思います。

しかし、そのような場合に、どうしても注意しなければならないことがあると思います。それは、イメージを先行させたり、イメージを悪用して本来の意味を隠してしまったり、あいまいにしてしまうこともあるということです。そういう使い方はやはりまずいと思います。最近よく聞くもので例を挙げますと、リストラなどというのは本当に嫌な言葉です。リストラというのはもともと、リストラクチュア、リストラクチャリングで、本来は「再構築」であるわけですが、最近はほとんど従業員の解雇の意味で使われます。あるいは、もっとひどい言葉を使いますと「クビ切り」です。リストラという言葉を使っているのは、明らかに「解雇」や「クビ切り」などという言葉を使うと何かおどろおどろしい感じがしてしまうので、それをごまかすためだけではないかと思います。

ですから、国語研究所の外来語委員会の方式に従いますと、リストラという言葉を使うとしたら、再構築なり解雇なりの意味をきちんと添えるべきだと私は考えております。リストラと言っておけば経営者は経営責任を問われずにすむのかもしれませんが、クビ切りであることにまちがいはありません。少し話が脱線してしまいましたので、本題に戻らせていただきます。

いわゆる外来語の言い換え提案というのが出てまいりましたのは、それだけ日本に外来語（カタカナ言葉）が氾濫していることを物語っているものだと思います。なぜそれほど外来語が増えてきたのかといいますと、当然それは外国との交流が盛んになり、外国のものだけでなく考え方なども日本語に置き換える必要があるためです。その際に、日本語では、先程から申し上げているように、ほぼカタカナで置き換えてしまっているのです。そのような外来語の受容のしかたをしているわけです。もちろん「かな」というのは大変便利な言葉であり、音を表す上で、我々日本人にとっては大変ありがたい便利な道具です。外国語に関しても、正確な発音ではないにしろ、それに近い音を「かな」によって表すことができます。しかも、カタカナを使いますと、外来語であることが一目瞭然という大変便利なものです。私たちは外国から入って来る言葉について、あまり意味を考えずとも、そのままカタカナを用いて似たような発音で表記すると、苦労せずに日本語に定着させ、国語の中に取り入れることができます。ですから、カタカナ言葉というのがどんどん増えてしまっているのです。それが今の日本の状況であると思います。

もう１つ反省を込めていいますと、私自身もそれを痛感するのですが、外国から入ってくる言葉を漢字で表すことができるのだろうかということです。外国からさまざまなものや考え方が入ってくるということは、明治維新のころも全く同じです。そのとき、例えば私が専攻している文学は、もともとリタラチャーというのを「文学」と訳したわけです。そのような漢字で置き換える能力、漢字による造語力というのか、言葉を作る能力というものを、私たち今の日本人はかなり失ってしまったのではないか。それがカタカナ言葉の氾濫を招いている一つの原因であるかもしれないと反省しています。

以上が日本の状況ですが、では中国ではどうだろうかという話に移ります。中国語で使用されるのは基本的に漢字だけです。実際の文章では、漢字に加えてアルファベット（ローマ字）やアラビア数字、各種の記号が用いられますが、日本語のかなに相当する文字はありません。この会場に来ていらっしゃる皆様には資料をお配りしてあるのですが、高松町の皆様には渡っていない資料があります。先にそれを見たいと思います。

今、画面に映っているものですが、お手元の資料の中にあまり印刷がきれいでないものが２枚あり、そのうちの文字がたくさん書いてあるものがあると思います。これは中国の江沢民主席がアメリカのブッシュ大統領に宛てた祝電の内容です。本来、日本の新聞であれば、いろいろなカタカナ言葉が出てくるところです。これをご覧いただきますと、最初の宛名の部分は「ワシントン　アメリカ合衆国大統領　ジョージ・W・ブッシュ様」でしょうか。「先生」は「様」と訳せばいいのでしょうか。その中には、略字のWという文字と、あとは数字としてアラビア数字が出てくるだけで、それ以外はすべて漢字で表記されております。この電文の途中には大統領夫人のローラさんの名前も出てくるのですが、それがはたしてどこに出ているのか、皆さん、おわかりいただけるでしょうか。このように漢字ばかりですと、なかなかすぐにはわかりません。

もう１つの資料をご覧ください。これは新聞の日付と曜日が出ています。あとでも問題にしますが、「壬午年正月十八」とあるのは旧暦です。これは「人民日報」の日付欄です。「人民日報」と申しますと中国共産党の機関紙ですが、その中にきちんと旧暦も表記されているわけです。それがなければ新聞にならないのです。その下に「北京地区の天気予報」というのがあります。その中に、例えば「降水概率 30%」とあります。このようなところに数字や記号などが使われております。さらにいいますと、一番下の気温を表す「９℃／－２℃」というところにやや漢字以外の文字が使われております。しかし、基本的には中国語の文章というと、漢字のみということになるかと思います。

２．中国における翻訳

このような漢字のみの言葉の中で、外来語はどのように表記されるのかということが、私が今日お話ししたい主なテーマです。これは高松町の皆様にもお配りしてある資料だと思いますが、お手元のワープロで打った２枚の資料をご覧ください。中国語に翻訳する際の方法を、便宜的に５つに分けてみました。①音訳、②直訳、③意訳、④ローマ字表記、そして⑤は①～④を組み合わせたものです。これについて、趙菁さんに少し手伝っていただきながら説明を加えていきたいと思います。

それではまず①音訳のところですが、人名や地名、固有名詞の類は、大体当て字を使って表現しております。まず出したのは、昨年２人のダブル受賞で話題になったノーベル賞のノーベルです。

（趙）　諾貝爾。

それからロシアの文豪のドストエフスキー。

（趙）　陀思妥耶夫斯基。

言いにくそうですね。これは日本語でも、少し舌をかみそうな感じがするのですが、中国語でも同じようにドストエフスキーは言いにくいものであるということです。それから、アメリカ大統領のブッシュです。

（趙）　布什。

今度は地名です。アメリカ合衆国。

（趙）　美利堅合衆国（美国）。

普通は簡略に「美国」と言うのが多いのではないでしょうか。それからアメリカと言うときに、日本語であれば別の表記をしますが、中国では「美利堅」といいます。我々の世

代でしたら、メリケン波止場やメリケン粉などと言うので、アメリカのことを「美利堅」と書かれても何となくわかるような気がしますが、今の方たちにはひょっとしたらわかりにくい表現なのかもしれません。続いて花の都パリです。

（趙）　巴黎。

「黎」という文字はべつに変えたわけではありません。中国語では、「里」ではなく、黎明の「黎」を使います。それから、モスクワです。

（趙）　莫斯科。

このように、人名や地名の類はたいてい当て字で表記されます。それ以外の、例えばこれは企業の名前なので挙げていいかどうか迷ったのですが、企業名や一般の名詞であっても、やはり音だけで表してしまうものがかなりあります。中国の都市に行きますと、そこらじゅうに建っているマクドナルドです。

（趙）　麦当労。

同じく、ケンタッキーです。

（趙）　肯徳基。

これは、中国の北京や上海のあちこちにお店があります。それから、一般の名詞では、コーヒーは次のようになります。

（趙）　咖啡。

それから、動物のコアラです。

（趙）　考拉。

コアラは、何かしら物を考えている風情がないわけではありませんが（笑）、たぶん音だけで「考拉」にしたのではないかと思います。次は全く特殊な音訳です。カラオケ。

（趙）　卡拉ＯＫ。

日本語から中国語に入っていく言葉というのは、漢字を使っておりますので、普通、漢字を使って、その漢字の中国音で表現されることが多いのですが、このカラオケに関しましては、日本語のカラオケをそのまま音として表記するような、きわめて特殊な例です。これらは本当に意味がない、全くの当て字と言ってよいものであろうと思います。

ところで、同じ当て字をするのであれば、多少はおもしろい表記にしたいと思うのが人情です。次のような例は傑作としてよく挙げられるものです。コカコーラです。

（趙）　可口可楽。

コカコーラだけ挙げますと、あとでしかられてはいけませんので、次はペプシコーラです。

（趙）　百事可楽。

どちらもきちんとした意味があります。意味はカッコの中に付けさせていただきました。それから、ビタミンは２つ挙げましたが、音訳的なのはあとの方です。普通は次のように言われます。

（趙）　維生素。

これは生命を維持する素ということで、意訳の方に持っていくべき表現だと思いますが、音訳的な表現としては次のようになります。

（趙）　維他命。

次はＴＯＥＦＬですが、アメリカの大学などに留学するときに、一定以上の点数を持っていなければ専門の教育を受けられないというもので、いわゆる英語の資格試験です。

（趙）　托福。

これは文字どおり福を託すわけでありまして、アメリカに留学すると将来幸福になれるという思いを込めて、「托福」と言っているのではないでしょうか。少し悲しくなる言葉ではあります。以上、音訳というのはコカコーラやペプシコーラのような傑作はありますが、基本的には当て字ということになるかと思います。

先程少し申し上げましたが、例えばカラオケというようなものは、珍しく日本語の音を中国語にそのまま持っていったものです。高松町の皆さんは中国語をなさっている方が多いということで、レジュメも簡体字で作るべきではなかったかと反省しているのですが、黒板には簡体字で書かせていただきます。「手続」は日本語で「てつづき」というように、純粋に日本語なのです。これが中国語に入ったときに、「てつづき」という発音になるかというと、決してそうではなく、中国語音の「手」は「ショウ」という発音、「続」という字は「シュィ」という発音ですので「ショウシュィ」となります。大体、日本語から中国語に入っていくときにはこういうかたちになることが多いのです。カラオケは少し例外的なものと思ってください。

以上が音訳です。音訳を多めに挙げたのは、中国語は漢字を使うので、音訳より意訳の方が多いのではないかと思われるかもしれないけれど、音訳も多いですよということを示そうと思い、あえてたくさん載せております。

それでは続いて②直訳です。これは逐語訳といいましょうか、ここに挙げているのはすべて、英語の意味をそのまま中国語に当てはめたものです。それではホットドッグです。

（趙）　熱狗。

文字どおり熱い狗です。それからホワイトカラーです。

（趙）　白領。

これも白い襟ということです。「領」というのは襟を意味します。それからクレジットカードです。

（趙）　信用卡。

説明を少し。「卡」というのは上と下のような字です。外来語によく使われるのですが、カードの類はこの「卡」という字が使われます。例えば、最近中国に行きますと、ホテルなどでこういったもの（房卡）を渡されるのですが、「ファンカァ」というとカードキーを意味します。そういったカードの類を「卡」といいます。覚えておくと便利な漢字だと思います。それから、スーパーマーケットです。

（趙）　超級市場。

これは２字に略してしまって、

（趙）　超市。

超市という表現もよく見られます。それから、コンビニエンスストアです。

（趙）　方便店、便利店。

これはコンビニエンス、つまり便利であるという意味の直訳です。後者はそのまま日本語でもわかる表現ですし、中国語では便利であるというのを方便といいますので、方便店も「便利な店」と直訳したものになります。中国語にはこういったものがかなりたくさんあります。日本語にもありますからおわかりいただけると思いますが、例えば「超人」というのがあります。この映画は中国で結構はやりました。おわかりいただけますか。

（フロア）　スーパーマン。

スーパーマンです。「超」というのがスーパーを意味するわけです。もっとも、スーパーマーケットというのは自分で品物を選んで買ったりしますので、「自選商場(ヅーシュエンシャンチャン)」というような言い方もあります。こうなると③の意訳です。しかし、②に挙げたのは直訳のものです。

次の③に挙げてあるのは、意訳です。①の音訳のコカコーラやペプシコーラというのは、コカコーラの内容を意訳して作ったものではありませんが、③の意訳というのは、音とは一切かかわりなく、意味内容を中国語に置き換えたものです。最初のものは日本語にも入ってきている言葉ですが、コンピュータです。

(趙)　電脳。

これは電気、もしくは電子による脳ということでしょう。それから、ロボットです。

(趙)　機器人。

機器というのは機械を表しますので、機械の人ということです。それから、スチュワーデスです。

(趙)　空中小姐。

これは、空のお嬢さんということになっています。それからライターです。

(趙)　打火機。

火を打つ機械ですね。火を切るというのでしょうか。それからエレベータです。

(趙)　電梯。

電気で動くはしごということでしょう。なお、スチュワーデスを空中小姐と書きましたら、趙菁さんにこれも挙げておかないとしかられるのではないかと注意を受けました。昔

からこれはありましたが、空嫂といいます。「嫂」は書きにくい字ですね。この「嫂」というのは兄嫁さんを指したりします。要するに嫂といったら姉さんという感じでしょうか。大体、既婚の女性に対して嫂という言い方をしますので、同じスチュワーデスさんでも少しお年を召した方を空嫂といいます。べつにこれは悪い意味で言っているわけではありません。一時期中国で、空姐は冷たくてサービスが悪いので、空嫂の方がはるかにいいということで、積極的に空嫂を雇用する航空会社もありました。どんどん話が脱線していってしまうのですが、ともかくこういったものは、意味をとって外来語を中国語に置き換えたものであるとご理解ください。

④は単にローマ字表記といいますか、アルファベットをそのままにしたものです。ＩＴ、ＩＱ、それからＣＤ、ＵＦＯ、そして最近中国が加盟した世界貿易機関のＷＴＯといったものは、このまま表記されております。あとに世界貿易機関などといった漢字による訳語が注記される場合ももちろんあります。しかし、ＷＴＯというのはそのままで通じるものだと思います。

これらの①～④が主なものなのですが、しかし、実際には次に挙げた⑤のかたちが結構多いのです。すなわち、単に音訳、単に意訳というだけではなくて、それらを組み合わせることによって一つの外来語を作ってしまうというものがかなりたくさんあります。いくつか例を挙げました。インターネットです。

（趙）　因特網。

これは発音をお聞きになっておわかりだと思いますが、「因特」というのがインターネットのインターです。かつては国際うんぬんという訳を付けていました。それはインターを意訳したものですが、最近の「因特網」という言い方は、国家が推奨している呼び方ではないかと思います。ネットに相当するのが網です。意味を表す言葉としてこれを加えまして、「因特網」でインターネットを指すということです。それからハンバーガーです。

（趙）　漢堡包。

このハンバオというのは地名で、ハンブルグなのです。おそらく「ハンブルグの肉まん」という感じで、「漢堡包」というのをハンバーガーに使っていると思うのです。趙菁さん、

それでよろしいのでしょうか。「包」というのは、ひょっとして面包の方でしょうか。パンの方ですか。私は肉まんの方がふさわしいだろうと思って、勝手に肉まんだと思っていたのです。簡体字で書いた方がわかりやすいので、書きます。もともとは麦が付いているのですが（麺）、面包です。パンのことを指すようです。申し訳ありません。

（趙）　挟むという意味もありますので、おそらく・・・。

次も事前に趙菁さんから指摘を受けました。最近は「酒」を付けないのではないかと言われたのですが、一応「酒」を付けて発音していただきます。ブランデーです。

（趙）　白蘭地酒。

「白蘭地」というのがブランデーという音を表して、それに意味を表す酒を付けるというかたちです。最近は「白蘭地」というだけでブランデーをさすから、酒は必要ないということです。こういったものは、最初に音があって、意味を表す言葉を後ろに付けたものですが、それと逆のかたちのものも存在します。これは酒を飲むバーです。

（趙）　酒吧。

これはバーで、ホテルなどのバーは「酒吧」といいます。それからタイヤです。

（趙）　輪胎。

これは円い輪と、音としての胎を後ろに付けただけです。胎は胎児ではありません。それから、先程見たように、コーヒーは咖啡と言いますが、インスタントコーヒーだったら、次のように意味を表す言葉を前に付けます。

（趙）　速溶珈琲。

速く溶けるコーヒー、速やかに溶けるということです。では、インスタントラーメンは

速く溶けるラーメンでいいのかということですが、溶けてしまっても困るわけです。インスタントラーメンはどう言えばよいのでしょうか。

（趙）　方便面。

おわかりいただけましたでしょうか。先程の「方便」、便利なという言葉を加えます。便利な麺ということで、方便面というように表します。どうなのでしょうか、インスタントラーメンというのは日本語だけかもしれません。大体英語であれば、ヌードルなどと表現するでしょうから、たぶんインスタントラーメンというのは日本語でしょう。そういえば、私たちが子どものころは「即席ラーメン」という言い方もあったなと思い出しました。いずれにしましても、同じくインスタントと言うからといって、一つの中国語になるかというとそうではありません。１対１で対応するわけではありません。やはり意味をとって、便利な麺というような言い方になってくるわけです。それから、アルファベットを使った表現というのもいくつか出てまいります。Ｘ線です。

（趙）　Ｘ射線。

それからポケベルです。

（趙）　ＢＰ機。

それから、電子化というのでしょうか。エレクトロニック化です。

（趙）　ｅ化。

あるいは、これは口語では使われずに、書き言葉として出てくるだけのものかもしれません。しかし、中国の代表的な辞典の中には、もうとられております。次は、音と意味の両方を表す語を付けた、大変高度な技術を用いた翻訳例です。トラクターです。

（趙）　拖拉機。

これは、ひっぱる機械ということです。「拖拉」というのがひっぱるという意味です。次は、球技としてのボーリングで、土を掘るのではありません。

（趙）　保齢球。

これは「齢を保つ球」という意味です。若さを保つ球技ということです。中国でボーリングというのがはやった時期に、ボーリング場に出かけるのはかなり地位の高い人たちで、文字どおり「保齢球」でした。ある程度年を召した方が、健康を維持するためにするスポーツでした。今はそうではなくなっていると思います。傑作中の傑作が次のミニスカートであります。

（趙）　迷你裙。

これは、台湾の方から入ったのでしょうか。それとも香港の方から入ったのでしょうか。もともと大陸の方では次のような表現でした。

（趙）　超短裙。

私などはこちらの方が、妄想をかき立てられるのですが（笑）。超短いスカートということです。もともと中国には「短裙」というものがあります。ひざ丈ぐらいのスカートを「短裙」というのです。ひざより上だということで、超を付けたのだろうと思います。しかし、超短裙ではあまりにも味気ないというのでしょうか、最近では大陸の方でも「迷你裙」が一般的になっています。ついでながら、ミディスカートのことを「ミーディエチュン」すなわち「親父を迷わすスカート」と言っております（笑）。親父はミディぐらいで迷ってしまうようです。申し訳ありません。発音記号を入れるべきであったと思います。大学の授業では学生にそう言われますと、「自分でお調べ」と言ってしまいますが（笑）。

３．漢字のしくみ

それでは、こういうものが中国語の外来語の翻訳のしかたであるということをお含みい

ただいたうえで、実は、この言葉の作り方というのが、漢字の作り方と全く同じではないか、という話に移りたいと思います。漢字のしくみといいましょうか、成り立ちについては「六書（りくしょ）」という言葉で説明がなされております。「ろくしょ」と言ってもいいのですが、格好をつけて「りくしょ」と言うのが普通です。象形、指事、会意、形声、仮借（「かしゃく」ではなくて、「かしゃ」といいます）、そして転注です。これは漢の時代から始まります。日本ではまだ弥生時代でしょうか。許慎という人の『説文解字』というすばらしい字書が、漢の時代にはもうできていまして、許慎は漢字のしくみを「六書」という言葉で説明しているのです。つまり大変古くから漢字のしくみについてかなり深い理解があったのです。

ただ、象形から転注まで６種類挙げましたが、実際使われている漢字の多くは、その中の形声文字です。形声の文字が圧倒的多数で、それに会意文字を加えますと、大体９割以上は会意文字・形声文字です。象形文字や指事文字というのはごく基本的な部分を表す漢字であって、大体はのちに作られてくる漢字なのです。そして、会意の漢字とは、ある漢字の意味を表すもの同士をくっつけるものなのです。

例えば、意味を表す「日」と「月」を合わせて「明」という文字が作られます。これが会意文字ということになります。しかし、圧倒的に多いのは次のような形声文字です。つまり、「日」によって意味を表して、音としての「せい」を使います。「生」には意味は全くありません。生きるとか、太陽が生まれるという意味は全くありません。「生」は音を表すだけです。その「日」と「生」によって「星」、音としての「せい」を作るのが形声文字です。また「刀」という字で「とう」という音を表します。それから意味を表す「口」とで「召す」、つまり「しょう」です。若干「とう」と外れてまいりますが、それに近い「召」という形声文字が作られます。その「召」ができますと、例えばそれに意味を表す「日」、明るいということを表す「日」を加えて、昭和の「昭」、明るい、明らかであるという形声文字が作られます。仮に同じ「召」であっても、意味を表すところに「さんずい」を付けますと、同じ「しょう」であっても「沼（ぬま）」の意味になります。このようにして、中国の漢字というのはたくさん作られているわけです。

次の例はさらに高度になりまして、「日」という字に「光」という字を加えます。音としては「こう」となるのですが、その「光」というのは音としての「こう」であると同時に、光り輝くという意味をも表しています。音符であると同時に意符である、意符を兼ねているという漢字を加えたものを、会意形声文字といいます。会意であると同時に形声でもあ

るということです。

先程挙げました外来語に戻りますと、しくみは全く同じではないでしょうか。例えばロボットです。機器人といいますが、これは機械と人で、両方とも意味を表しています。機械の人というように意味を表す言葉を２つ並べたもので、会意の熟語であるといえるでしょう。また因特網は、因特というのが音を表していて、網が意味を表しています。つまり、音符と意符とで成り立つ形声の熟語であるということです。それから、音符と意符とがひっくり返って輪胎といいますと、円い輪を意味する輪と、音を表す胎でタイヤを意味します。これも形声文字です。そして最後に出たミニスカートです。迷你は、「ミニ」という音を表すと同時に、あなたを迷わすという意味をも含んでいます。つまり、それは音符であると同時に意符であります。裙というのはもちろんスカートで、２つ合わせてミニスカートという会意形声の熟語ができるのです。つまり、外来語を中国語に置き換える際に、さまざまな漢字を作ってきた伝統をそのまま生かしているといえるのです。やはり漢字について漢代からきちんとそのしくみを追究してきた伝統が、こうしたことを可能にしているのではないかと思うのです。

日本人にとって、形声というのはなかなかわかりにくいものです。日本で作られた漢字を国字といいますが、そのほとんどは会意文字です。代表的なものは「峠」ですかね。これは、山を上っていく、下りていく、その境のところが峠であるということで作られた文字です。ちなみに、20 年以上前でしょうか。「あゝ野麦峠」という映画がはやりました。これが中国に伝わりますと、峠という字がないので、「野麦嶺」になりました。日本語で嶺と表現すると、ニュアンスがおそらくずれてくると思います。「あゝ野麦の嶺」というと、すごく高いところに上らなければいけない感じがします。決してそうではない、野麦峠というのはそれほど高い山ではありません。そういうずれというのでしょうか。「峠」というのは「嶺」では表せない、何らかのニュアンスをきちんと表した、日本で作られたりっぱな漢字だと思います。

ただ、この「峠」に代表されるように、日本で作られた国字というのは、基本的には会意文字なのです。例えば、神様に捧げる木であるから「榊（さかき）」です。仏さんに捧げる木は「●（しきみ）」といいます。木（きへん）によって、まずそれが木であることを表します。そして、つくりの神が神様に捧げるというの意味を表します。国字の場合、大体作られる漢字というのは、このような会意文字です。音をも表す形声文字というのはないのです。それはしかたのないことで、日本語には音を表すためには、「かな」という便利な

ものがありました。ですから、あえて漢字によって音を表す必要がなかったのです。そのために、形声文字というような発想は出なかったのだと思います。

それに対して、中国語には「かな」がなくて漢字のみなので、漢字によって音も表さなければなりませんでした。ですから、漢字でいえば形声文字がかなり作られたわけですし、先程から申しておりますように、外来語を作るときにも形声文字の作り方に似たような熟語の作り方をするのです。そういう意味で、大変長い間文字を作ってきた伝統が、外来語の作り方や翻訳のしかたにも影響を及ぼしているといっていいと思います。

４．伝統文化の保持

私の一番言いたいメインのところはこれで尽きてしまったわけですが、「伝統文化の保持」と書きましたので、あと少し伝統文化について付け加えていきたいと思います。

先程、「人民日報」を見たときに、「壬午年正月十八」というのがありました。中国共産党の機関紙の最初の日付のところに、なぜか旧暦が記されています。中国語では旧暦といわずに農業暦である農暦といいますが、これが記されているのです。これをいったいどう理解したらいいのでしょうか。私は日本の新聞すべてにあたったわけでありませんが、旧暦を載せている新聞というのがあるでしょうか。ほとんどないのではないかと思います。いずれにしましても、なぜ旧暦を書くのかというと、当然それが読者にとって必要な情報であるからです。必要な情報だからそれを載せるのです。旧暦の何月何日であるということが、今でも中国の人たちにとっては重要な情報であるというわけです。

また、中国で出ているカレンダーも同様です。若者が使うタレントや歌手の写真入りのカレンダーであったら、ひょっとしたら載っていないかもしれません。あるいは、日本から輸出されたカレンダーなら出ていないかもしれませんが、中国伝統のカレンダーであれば、必ず旧暦、農暦も載っています。もちろん、最近の暦は農暦の１月１日から始まるわけではなく、公暦の１月１日から始まっています。それにしても、その中でそれが農暦の何月何日であるかということを記さなければ、暦としての役割を果たさないのです。

それは結局何を意味しているのかといいますと、我々は、例えば端午の節句といったときに、５月５日というのは新暦（太陽暦）の５月５日を子どもの日にしています。しかし、中国で端午節といったらどうでしょうか。中国の方もいらっしゃるようですが、やはり旧暦、農暦の５月５日です。また、皆さんもよくご存じのように、中国で最もにぎやかな日というのは、春節、すなわち旧暦の正月です。今年は２月１日でしょうか。大体２月前半

にありますが、その時期になると民族大移動が起こったりするわけです。さらに、旧暦の何月何日とは言えないのですが、冬至から数えて何日目というようなかたちで清明節が決められています。

また、最近は七夕というのはあまり言わないかもしれませんが、それ以外の中秋節などは日本よりもはるかに盛大にお祝いされます。日本で月餅といいますと、中村屋の月餅といったものを思い浮かべてしまいますが、中国の月餅というのは本当に月で、中にゆで卵にした卵が入っているものもあり、中のあんというのは色とりどりです。おそらく、家ごとに違っていたりするのではないでしょうか。最近は家で作らずに買ってきてしまうかもしれませんが、もともとは各家にいろいろな月餅があったはずです。

要するに何が言いたいのかといいますと、公的な行事というとメーデーや国慶節ですが、こういったものはもちろん5月1日、10月1日と新暦で祝います。しかし、中国の人たちのほとんどは、旧暦に即したリズムで日常生活を送っています。そのために、カレンダーにせよ新聞にせよ、農業暦を欠くことができないのだということです。ただし、これもひょっとしたら変わるかもしれません。というのは、中国にもゴールデンウイークができたのです。何年前からできたのでしょうか。昨年ぐらいからですか、一昨年ぐらいでしょうか。ゴールデンウイークはどのように訳すのかと思ったら、そのとおり「黄金周（週）」と訳されてしまいました。これは、たぶん日本のゴールデンウイークをそのまま踏襲した訳だろうと思います。年に2回、長期の休み、うまくすれば10日ぐらい連続して休暇を取ることができるような時期ができたのです。ひょっとしたら中国の人たちの生活のリズムというのも、こういった黄金周中心のものに変わるかもしれません。これはあくまで予測ですが、可能性としてはあると思います。

もう1つ「伝統文化の保持」ということで申しますと、メートル法と伝統的度量衡の併用ということがあろうかと思います。公式な表示ではメートル法です。中国でも1991年から法定計量単位に指定されております。しかし、実際にはどうでしょうか。実際の生活の中では、伝統的度量衡を使うことの方が多いのではないでしょうか。これはその人の生活によって、都市での生活や農村での生活によっても違いが出てくるかもしれません。例えば、私などは中国で買い物をするときに、「多少銭一斤（ドゥオシャオチェンイーヂン）」と聞くことはしょっちゅうですが、「多少銭一公斤（ドゥオシャオチェンイーゴンヂン）」と聞いたことはまずありません。「1キロいくらですか」というような問い方はありますけれども、まずあまり耳にしません。もっとも、私がそういう店ばかり行くせいもあるかも

しれませんが（笑）。

ただ、中国でもスーパーマーケットが増えてきているということから、「１袋１キロ」などというようなかたちになりつつあるということは確かです。しかしながら、例えば、先日ＮＨＫのテレビを見ておりましたら、麦を刈る人たちの話を放送していました。コンバインに追い立てられ、手で麦を刈る人たちの働く場所がどんどんなくなりつつあるという番組でした。その中で、田舎で値段の交渉をしているときに、１畝あたりいくらであるというようにやっていました。１畝は循環小数になるのでしょうが、中途半端な6.666アールという単位です。１アール（１公畝）あたりいくらであるという値段の交渉をしていたわけではありません。日本で申しますと、私も田舎の出身だからわかるのですが、田んぼ１反歩あたりいくらというような交渉をしていたわけです。いずれにしましても、中国では伝統文化を保持しようという意識が日本に比べてはるかに強いと感じます。

５．おわりに

最後になりますが、私が中国語の勉強を始めたのは1971年ごろです。中国では文化大革命の最中でした。ですから、中国というのは西側諸国とほとんどつきあいがありませんでした。東側、社会主義国といっても、その当時はソビエトでしたが、ソ連とも仲が悪くって、深くつきあう外国というのはそれほど多くなかったはずです。そういう状況ですから、当時使われる外来語というのも、それほど多くはなかったと思います。もちろんロシアなどから入った言葉などもいろいろあったと思いますが、それほど多くなかったはずです。少なくとも中国の一般の人々がそれほど外来語を使ったとは思えません。

しかし、それから30年が過ぎました。1980年ごろの開放政策以来、中国の政策というのは外にどんどん開くというものになりました。今のグローバル化、嫌な言葉ですが、実際グローバル化と言いつつアメリカナイズされているような感じがしますのであまり好きではないのですが、中国語では「全球化」といいます。このグローバル化の波というのは、中国にも高く及んでいます。それはおそらく、今後ますます中国にも及んでくるものと思います。そうしたグローバル化の波の中で、中国における外来語の翻訳がどうなっていくのかということについて、少しお話したいと思います。

外国との交流が増えれば増えるほど、当然外国から入ってくる言葉は多くなってまいります。おそらく30年前と比べたら今は、何百倍、何千倍というスピードで入ってきているのかもしれません。このスピードは、30年前までいかなくても、例えばミニスカートの中

国語訳はいつぐらいにできたのでしょうか。私はよく知らないのですが、迷你裙というような表現は、それほど昔ではなかったと思います。しかし、ミニスカートという言葉に対して迷你裙という訳語を付けたという時代の何十倍ものスピードで、今は外来語が増えてきているのです。あるいは、中国語に翻訳しなければならない言葉が、外国からどんどん入ってきているのです。そういう状況の中で、音もちょうどよくて、意味もぴったりするような言葉、訳語を考えている余裕がはたしてあるのでしょうか。それはなかなか難しいのではないでしょうか。おそらくこれからは当て字による音訳やローマ字を使った表記がどんどん増えてくるだろうと思います。

あまりふさわしい例ではなかったのですが、ここにＥメールという言葉を挙げています。正式にはこれは「電子郵件」（電子郵便）といいます。ところが最近は「伊妹儿」といいます。漢字で表しますと違和感を覚えますが、カタカナの「ル」のような「儿」が簡体字で、語尾をｒ化せよということで、直前の「ｉ」が落ちますから、発音は「イーメール」になります。つまり、Ｅメールの音訳であるわけです。

漢字の字面を見て意味を考えたら、ちょっと悩んでしまいますね。「伊」というと彼や彼女などをさします。そして「妹」とありますが、彼の妹、彼女の妹と言われても何のことだかわかりません。つまり、完全にこれは当て字なのです。ただし、なぜこのようなものが出てくるのか、なぜこのような音が出てくるのかといったら、現実の会話の中では「電子郵件」などと言っていなくて、中国でも「イーメール」と言っているのだと思います。それをそのまま表記しようとして、カタカナのような感覚で「伊妹儿」を使っているのではないでしょうか。こういういわゆる当て字による翻訳のしかたというのは、おそらく今後ますます増えてくるであろうと思います。

３番目に挙げたアルファベットを使った「ｅ郵件」というのは、実は私が作ったものです（笑）。見ればわかりますね。電子関係のものはアルファベットの「ｅ」で表してしまうことが多いですから、ｅ郵件というように表記してもたぶん通じるだろうと思います。ただ、発音で、耳で聞いて通じるかといったら保証のかぎりではありません。ひょっとしたら、「イー」というのは数字の１であるととられてしまう可能性もあります。いずれにしましても、こういった表記というものがどんどん増えてくるであろうと思っております。

実は、私が苦し紛れに「ｅ郵件」などを作る必要がなかったということに、夕べふと気づきました。もっといい例があったのです。これは数年前から使われております。アルファベットのＴを使って「Ｔ恤」。これは「シュィ」という音ですが、日本語音で「じゅつ」

ですから、地方によっては、これをつまる音で発音します。南方の方言の中には、これを「シャツ」に近い音で発音している地域があるのです。たぶん、その地域でできたのだと思いますが、現代中国語では「ティーシュィ」と発音します。最初見たときにはわかりません。もちろん文脈の中で、「着る」というような動詞が前に付けば、「ああTシャツか」とわかりますが、これだけ出されても普通はわからないと思います。

ただ、これを見まして、日本人である私はついつい懐かしく思い出しました。日本語はTシャツより前に、「Yシャツ」があったのです。日本人はすばらしいというか（笑）。もともとYなど関係ないですよね。ホワイトシャツ（白いシャツ）であって、それが表記のうえで「Yシャツ」となってしまうのは、日本人の創造であると思います。

実は、私は「T恤」という表記を見たときに、大変ショックを受けました。いえ、不安を感じました。というのは、中国語が大きく変わって私が中国語でご飯を食べることができなくなる、変わる中国語についていけなくて中国語を教えることができなくなるということで、不安を感じたわけではありません。言葉というものが時代とともに変わっていくことは、私は当然だと思います。ただ、言葉が変わるということが、同時に中国社会の変質、私の大好きな中国文化の変化をも意味するのであれば、大変寂しい、少し心配だという思いがあったわけです。それは私のような部外者というか、よそ者が、中国が変わっていくことに対して寂しいとか、一抹の不安を覚えるという言い方になってしまうのはまずくて、実際に中国に住んでおられる方たちからすれば、変化はあるいは明るい未来を指すのかもしれません。ただ、日本の経験からいえば決して明るくないと私は断言できます。いずれにせよ、こういう言葉は、おそらく中国の社会、文化の変化を象徴しているような感じがするのです。そういう意味で、やはり象徴的な言い方でありますが、私は中国に行って「多少錢一斤（ドゥオシャオチエンイーヂン」と言いたいのです。このすばらしい中国語をいつまでも使いたいと思っているわけです。「何グラムいくらですか」という言葉は使いたくないですね。それが私の願いです。

なお、最後に皆さんに頭を使っていただきましょう。これはもうご存じの方がいらっしゃると思います。降水確率 30%というのがありました。「30%」というのを中国語ではどう言ったらよいでしょうか。

私は最初、これをどう言うのか知りませんで、「サンシーパーセント」でいいのではないかと思いました。しかし、中国人はそうは言わないのです。「百分之三十」と言われたら、そのとおりだと思いました。百分率ですから、なるほどこれでいいのです。百はふつう前

に「一」を付けますが、百分率の場合には付けません。こういう表現がいつまでも続いてほしいです。「百分之三十」というのは泥臭い言い方だと思うのですが、「サンシーパーセント」などという中国語になってほしくないと思いつつ、今日の話を終わらせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました（拍手）。

質疑応答

(質問者1)外来語の漢字表記は、中国ではどこが決めているのでしょうか。それから、一般から公募のようなかたちというのはないのでしょうかという質問です。

(矢淵)　外来語のすべてについては、私も知りませんが、公式なもの、例えば「ブッシュ」などといったものについては、新華社が決めると聞いています。新華社はニュースの元締めのようなところで、ここが決めているようです。要するに、マスコミの元締めで一番広報しやすいところですから、国家的なものに関しては、ここが認めたらそれが公式なものになります。ただ、「伊妹儿」のようなものは、公式にどうのこうのというものではなくて、例えば口コミ的なものから広まったり、有名な作家がそれを使ったといったようなことからはやっていくのだと思います。

例えば、先程の例で申しますと「空中小姐（スチュワーデス)」というのも、もともとは小説の中から出てきた言葉ではないでしょうか。王朔かだれかの小説ではなかったでしょうか。それが広まって、結局、皆使うのを認めざるをえないものもたくさんあります。ただ最初の、少し無味乾燥のような音訳、国や人の名前などは新華社で決めていると思います。それでよろしいでしょうか。

(質問者1)それでは、一般人からの公募などというのはほとんどないのですね。

(矢淵)　ないと思います。

(質問者1)今のところはないということですよね。私は少し不思議に思ったのですが、例えばノーベルやドストエフスキーなどですが、これは昔であれば新華社が統一するということですか。新華社なり、日本で言うところの文部科学省というか、その審議会などの機関があるということですか。そういう機関のようなものがもしあったら、それが統一していくというか。

(矢淵)　人名につきましては、おっしゃるようにいくつかあります。マクドナルドにしましても、店の名前としての「麦当労」というのは一般的ですが、人名としてのマクドナ

ルドはたぶんこれではないと思います。ケンタッキーもたぶん違うと思います。「ケンタッキー（肯徳基）」の「徳」という字は、おそらく意識的にこの「徳」という字を使ったのだと思います。文字を統一した秦の始皇帝ではありませんが、いろいろな表記があるというのは、やはり不都合な部分も多いと思いますので、統一される方向には来ていると思います。

(質問者1)統一するのに、新華社は当然なのですが、国の機関でそういったところはあるのでしょうか。日本で言う文部科学省や国語審議会というものは中国にもあるのでしょうか。

（矢淵）　申し訳ありません。今、私はそこまで存じません。聞いているのは、新華社でそういうことを決めているということです。政治的な要素が強いものが多くありますから、学者なり何なりに任せるというよりも、ある程度、政府の意向を反映させやすい機関で決めている可能性が高いと思います。

(質問者2)この場所の名前であるサテライト・プラザ、ミニ講演というのを、中国風に言うとどのようになりますか。

（矢淵）　プラザはどのように言うのでしょうか。サテライトは衛星ということで「衛星」でいいのでしょうね。プラザは「広場（ゴワンチャン）」でいいのですかね。

(質問者2)プラザの当て字は？

（矢淵）　当て字にしてしまえばいいということですね（笑）。「ザ」という音は見つけにくいですね。衛星に合わせて「座」でいきましょう。「普羅座」では天ぷらのようですね(笑)。すみません、少し考えさせてください。

(質問者3)日本では今、非常にカタカナ語の方がはやっていますが、カタカナ語では意味がわからない人が多いのです。今のサテライトもそうだと思います。中国で外来語を翻訳して、それを日本に輸入するというようなことも考えてもいいのではないかと思うのです。

（矢淵）　すでに入っているものもあります。例えば「電脳」というのが日本に入っていますね。わかりやすいものは確かにそうすればいいと思います。ただ、最近は、漢字そのものがわからなくなってきている世代が多くなって、常用漢字の範囲内しか知らないというようなことになってくると、中国語で漢字に訳されている言葉を日本語に持ってきたときに、かつて拉致の「拉」というのがひらがなになっていたように、ひらがなにしなくてはならないということが出てくる恐れもあります。そういう意味で、はたしてそのまま日本語に置き換えられるかどうかということは疑問ですが、私は交流があってもよいと思っています。交流すべきであると思っています。

もっと言いますと、漢字も字体を統一してほしいと思っています。このようなプリントを作るとき、いつもどうしようかと迷うのです。いわゆる簡体字を統一するような方向で、ぜひ日本と中国、あるいは漢字文化圏ですからシンガポールなども含めて話を詰めてもらえたら、本当にありがたいと思います。そのようになってきたら、先程おっしゃったような、外来語を漢字に置き換えたものを共通に使うということも、おそらく今よりもっと盛んになるだろうと思います。

(質問者3)そういう交流の動きはまだないのですね。

（矢淵）　残念ながら。

(質問者3)中国は日本のものの訳を一方的にやっているわけですね。

（矢淵）　中国でも日本の漢字を生かしたものも実はあるのですが、どれぐらいあるのでしょうか。中国人の皆さんにお尋ねしたいのですが、やはり日本の漢字と中国の漢字、いわゆる簡体字というのは、だいぶ違うとお思いですか。中国人にとっても違うということですね。

これは有名な例ですが、「国」という字をどのように省略化しようとしたかというと、中に王様がいるのはよくないということで、日本と同じ「玉」にしようとなりました。そういう意味では、これは１画増えたのですが、王様がいるよりまだ玉の方がいいだろうということです。これは日本の略字がうまく中国に入った例だと私は思っています。

金沢大学サテライト・プラザ　ミニ講演（２００３．１．１８）

中国における外来語の翻訳と伝統文化

矢 淵 孝 良（金沢大学外国語教育研究センター）

１．はじめに

外来の事物や概念を翻訳することのむずかしさ

国立国語研究所「外来語」委員会（平成14年12月25日）

《分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫についての提案》（中間発表）

―「外来語」の言い換え提案―

２．中国における翻訳

① 音訳（人名・地名など）

○ノーベル：諾貝爾　○ドストエフスキー：陀思妥耶夫斯基　○ブッシュ：布什

○アメリカ合衆国：美利堅合衆国（美国）　○パリ：巴黎　○モスクワ：莫斯科

○マクドナルド：麦当労　○ケンタッキー：肯徳基　○コーヒー：咖啡　○コアラ：考拉

○カラオケ：卡拉ＯＫ

○コカコーラ：可口可楽（おいしくて楽しい）

○ペプシコーラ：百事可楽（万事楽しい）

○ビタミン：維生素，維他命（かれの命を保つ）

○ＴＯＥＦＬ：托福（幸福への足がかり）

② 直訳

○ホットドッグ：熱狗　○ホワイトカラー：白領　○クレジットカード：信用卡

○スーパー・マーケット：超級市場　○コンビニエンス・ストア：方便店，便利店

③ 意訳

○コンピュータ：電脳（電気もしくは電子による脳）　○ロボット：機器人（機械の人）

○スチュワーデス：空中小姐，空姐（空のお嬢さん）　○ライター：打火機（火打ちの機械）

○エレベータ：電梯（電気で動くはしご）

④ ローマ字表記

○ＩＴ　○ＩＱ　○ＣＤ　○ＵＦＯ　○ＷＴＯ

⑤ ①～④の組合せ

○インターネット：因特網　○ハンバーガー：漢堡包（ハンブルクの肉まん）

○ブランデー：白蘭地酒　○バー：酒吧　○タイヤ：輪胎　○インスタントコーヒー：速溶咖啡

○Ｘ線：Ｘ射線　○ポケベル：ＢＰ機　○エレクトロニック化：ｅ化

○トラクター：拖拉機（ひっぱる機械）

○ボーリング：保齢球（若さを保つ球技）

○ミニスカート：迷你裙（あなたを迷わすスカート），超短裙

3．漢字のしくみ

六書（りくしょ）：象形・指事・会意・形声・仮借・転注

・会意 ＝ 意符 ＋ 意符　　・形声 ＝ 意符 ＋ 音符

日（意符）＋ 月（意符）→ 明（会意）

日（意符）＋ 生（音符）→ 星（形声）

刀（音符）＋ 口（意符）→ 召（形声）

日（意符）＋ 召（音符）→ 昭（形声）

水（意符）＋ 召（音符）→ 沼（形声）

日（意符）＋ 光（音符・意符）→ 晃（会意形声）

〈外来語の場合〉

機器（意符）＋ 人（意符）→ 機器人（会意）

因特（音符）＋ 網（意符）→ 因特網（形声）

輪（意符）＋ 胎（音符）→ 輪胎（形声）

迷你（音符・意符）＋ 裙（意符）→ 迷你裙（会意形声）

4．伝統文化の保持

（1）新暦と旧暦の併用

新暦（公暦）：公的な行事に即したこよみ
旧暦（農暦）：生活・習慣に即したこよみ（人々の生活のリズムを表すもの）

春節，元宵節，清明節，端午節，七夕，中秋節，重陽節

※ カレンダーや新聞に併記

（2）メートル法と伝統的度量衡の併用

メートル法：公式的な表示に使用（法定計量単位，１９９１年～）
伝統的度量衡：日常生活において使用

里（５００m），斤（５００g），畝（6.６６６a）

cf. 公里（キロメートル），公斤（キログラム），公畝（アール）

5．おわりに

グローバル化（全球化）→ 未知の事物・概念の流入 → 翻訳すべき語の激増

（例）Ｅメール：電子郵件，伊妹児，ｅ郵件

今後の予想……音訳，ローマ字表記の増加

2002年3月

1

星期五

壬午年正月十八

北京地区天气预报

白天　多云转阴

降水概率 30%

风向　东北

风力　二、三级

夜间　阴 部分地区有

小雨夹雪转多云

降水概率 40%

风向　偏东

风力　二、三级

温度　9℃/-2℃

江泽民主席致布什总统的贺电

华盛顿

美利坚合众国总统

乔治·W·布什先生：

在中美上海公报发表30周年之际，我愿和总统先生及所有关心和支持中美关系的人们共同纪念这一重要历史事件。

中美上海公报的发表是两国关系史上一个具有划时代意义的里程碑。公报为处理中美关系确定了基本指导原则。美方承认只有一个中国，台湾是中国的一部分。这些原则在后来的两国建交公报和"八·一七"公报中得到进一步确认和发展。

30年来，中美关系在广泛的领域里取得了长足的发展，给两国人民带来了实际利益，为维护亚太和世界和平与稳定发挥了重要作用。诚然，两国关系走过的是一条曲折的道路，但总能克服困难、向前发展。这说明中美关系的基础是牢固的，指导两国关系的三个联合公报是经得起时间考验的。

30年后的今天，国际形势虽然有很大的变化，但中美关系的战略重要性并没有改变。中美在维护亚太和世界的和平与稳定、促进本国和全球经济增长与繁荣，以及在打击恐怖主义等方面，都肩负着共同的责任，有着广阔的合作前景。

总统先生，我很高兴不久前在北京接待你和你的夫人劳拉。我们所达成的重要共识，对加强双方在各领域的交流与合作、推动中美建设性合作关系进一步向前发展，将产生深远的积极影响。

我愿与你为发展中美关系继续共同努力，并保持密切联系。

中华人民共和国主席　江泽民

2002年2月26日